

4/16 朝日

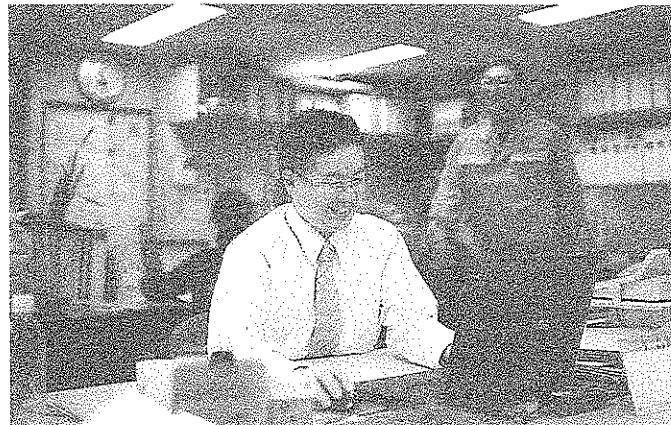
介護の支援策はあっても、  
絵に描いた餅。見えない壁に  
多くの人が苦しむ。

## 介護時代

働きながら

5

# あっても使えぬ制度では



仕事をする横澤昌典さん。介護は続いているが和やかな雰囲気で働けるという=横浜市、小玉重隆撮影

会議中に携帯が鳴った。  
母からだった。席を外して電話にいると、がんを患う父が危篤と告げられた。  
会議に戻り、「大変申し訳ありません。父が危篤との連絡なので、中座させていただきます」と告げた。席を立とうとした。  
そのとき上司は言った。  
「今から行つても間に合はないでしょ。君がやる発表は他にできる人がいない。そうなると困る」

結局、そのまま会議が終わるまで残るほかなかった。  
もう何年も前の出来事なのに頭から離れない。

横浜市の横澤昌典さん(42)は、介護の休業を思うように仕事をする横澤昌典さん。介護は続いているが和やかな雰囲気で働けるという=横浜市、小玉重隆撮影

そんなとき、「働くかないか」と知人をして声をかけってきたのが、いま働いている会社の社長だった。地元にある社員20人あまりの電気設備工事会社だ。

横澤さんはまづ伝えた。「いま私は介護がメインです」「早退する」「遅刻もします、本当にすみません、本當ですか？」それで構わない。社長は書つた。介護などの事情を抱える社員であっても、力を發揮できるような仕組みづくりを進めようとしていた。それがどうのうとしていた。それがどうのうとしてもプラスになるところだった。

横澤さんは総務部課長として入社した。父の吐血や救急搬送で早退したり休んだりしながら、介護支援の制度について取りかかった。

## 再々就職先 サポート体制づくり

そんなとき、「働くかないか」と知人をして声をかけってきたのが、いま働いている会社の社長だった。地元にある社員20人あまりの電気設備工事会社だ。

横澤さんはまづ伝えた。「いま私は介護がメインです」「早退する」「遅刻もします、本当にすみません、本當ですか？」

それで構わない。社長は書つた。介護などの事情を抱える社員であっても、力を發揮できるような仕組みづくりを進めようとしていた。それがどうのうとしてもプラスになるところだった。

横澤さんは総務部課長として入社した。父の吐血や救急搬送で早退したり休んだりしながら、介護支援の制度について取りかかった。

例えば、「介護をしていい」と届け出ている社員は、1時間程度の外出なら手続

き不要とした。市役所での手続

きや病院の支払いなど、こま

じましの用事を済ませやすい

ようにするためだ。また、業

務を原則2人で担当し、ひと

りが急に休んでも、フオロ一

つきのようになら。

つながらりを保つ

離職していく間、体は楽に

なったが、社会から隔絶さ

れれた気分にならわれた。「介

護だけになつても精神的に

追い詰められた。社会とのつ

ながりを保つためにも、生活

していくためにも、仕事を続

けられることが大事なんだ

大事です」

今の会社での5年あまりを

経て、改めて、そう思つ。

父は、横澤さんが今のは

に移つてから生まれた孫娘が

生きる力になつている様子

だ。前はホームヘルパーを拒

否した理由を言わなかつた

が、最近ようやく語った。

「何かを頼むと、ため息をつ

かれた」「ものを投げるよ

うに渡された」

横澤さんは「あの人たちは曲

分がいつもいいつけで、父

の気持ちを推し量る余裕さえ

なかつた」と振り返る。当時

は父に対しても腹を立てると

も多かつた。

「介護している人が追い詰

められる」とは、介護される人にどうでも決してプラスにならない。働く環境が本当に大事です」

## 「前例ない」休業あきらめ退職

取るにいがでます、大手企業を退職した経験がある。制度は整っていた。しかし横澤さんの経験では、「ある」と「使える」は別だった。

朝は3時には起きて洗濯。朝食の準備をして5時には家を出発し、再び高速で職場へ向かった。

訪問介護を利用した時期もあったが、途中から父が利用を拒んだ。「なんでだよっ」。

ケアマネジャーとの話し合いでも、「取得の前例がないで」

実家に戻つて母(67)と2人で父を介護しようと決め、会社に事情を説明した。だがすぐ転勤とはならず、横浜市と静岡県内の職場、片道260キロの道のりを車で通勤する」とになった。

仕事を終えると、夜の高速道路をひた走る。横浜の実家に帰宅するのは深夜になる。それから母と交代する。父が

せき込むと、呼吸が苦しくなつていなか様子を見る。その後父は奇跡的に回復した。今度の会社は介護に理解があり、同じ勤務地で働き続けられると聞いていた。しかし入社後数カ月で転勤を打診されるなど話が進まずと感された。「利益は減らさないように」遠距離の高速通勤はなくなりたが、帰宅後に介護が待つ

た。だが、見えない壁に阻まれた。「利益の責任を誰も取れない」「取得の前例がないで」粘つてみたが、当時の上司は独身で、静岡県にある事務所で働いていた。

娘家に近い勤務地に移つた。そのままの上司に念を押された。「利益は減らさないように」遠距離の高速通勤はなくなりたが、1年足らずで辞めた。「会社って何なんだ」。

「会社」って何なんだ。職を離れ、不信心の固まりになつていた。

生活で疲れはたまる一方だった。さらに母が体調を崩した。有給休暇も使い果たした。このままでは家族みんながダメになる。そう考え、介護休業を申し出た。

だが、見えない壁に阻まれた。「利益の責任を誰も取れない」「取得の前例がないで」

仕事で疲れはたまる一方だった。さらに母が体調を崩した。有給休暇も使い果たした。このままでは家族みんながダメになる。そう考え、介